

実践報告

## 学校における教育相談体制の充実と子どもの共有理解を図るための 「教育相談支援シート」の作成

— 配慮を要する子どもの把握及び支援の集約とその対応について —

中尾 恵子\*

【キーワード】教育相談体制，校内支援，共有理解，子どもをめぐる状況の把握

### 1 「教育相談支援シート」の作成の目的

現代の子どもの抱える問題は、心身の成長過程における身体的特徴や性格、友人関係、学業の成績や部活動、将来の進路に関する事、家庭生活や病気に関する事など多種多様であり、深刻化する傾向も見られる。

こうした現状の中で、学校に対する過剰な要求や過大な期待により、教職員の負担感や勤務時間が増えている。その結果、学校において最も大切であるはずの子ども一人一人と向き合う時間や機会が少なくなってきているものの、教育相談業務は学校生活において子どもと接する教職員にとっての不可欠な業務である。中学校学習指導要領解説（特別活動編平成11年）では、「教育相談は、一人一人の生徒の自己実現を目指し、本人又はその保護者などに、その望ましい在り方を助言することである。その方法としては、1対1の相談活動に限定することなく、すべての教師が生徒に接するあらゆる機会をとらえ、あらゆる教育活動の実践の中に生かして、教育相談的な配慮をすることが大切である」と記されている。

また、教育相談は、学校における基盤的な機能であり、教育相談を組織的に行うためには、学校が一体となって対応することができる校内体制を整備することが必要であるとともに、教育相談に対する教職員一人一人の意識を高めることが必要であると考えられる。教育相談に関する校内体制（組織）は学校の実情に応じて様々ではあるが、生徒指導の機能と教育相談の機能に隙間が生じないように、両者の機能が補い合って関連性を持つことができるような体制を検討する必要がある。さらに、教職員等の異動により、それまでの学校内外における連携体制、ネットワークや教育相談の情報、支援が途切れることなく継続していくことは大切でもある。

そこで、この報告では校内における教育相談体制の構築とその機能の充実を図ることを目的として、子どもの情報を一目で概観できる「教育相談支援シート」の作成を試みた。このシートの大切な視点としては、それぞれの教職員等が多忙な業務の中で、対象の子どもにどのような対応がなされて、どのような支援を受けているかなどの情報を、簡潔に効率的にまとめて共有することができるようにしている。

### 2 方法

#### (1) 「教育相談支援シート」の作成

最初に「教育相談支援シート1 月別欠席子ども累積表」を作成してみた。この支援シートの作成を試みたのは、大規模校で初めて教育相談主任を担当したときのことであった。小林（2009）の研究や書籍、これまでの教育相談担当の経験から、限られた時間での効率的な情報収集を行うことを第一

\*佐賀大学大学院学校教育学研究科

に考えた。当時は不登校や保健室登校、学校適応指導教室に通級する子どもが多く存在し、一人一人の様子や学級担任との情報交換や対応等について、学級担任とじっくりと話す時間も取れずにいた。そのような中で子どもの様態を把握する手がかりとして、欠席日数や遅刻に着目した。毎月末に学級担任が記入する月例報告から、1か月に3日以上欠席をした子どもをピックアップしていき、月ごとに累計していくと少しずつ一人一人の様態が把握できるようになっていった。また、教育相談活動年間計画で子どもの実態を把握するアンケート等を実施して、気になる子どもをピックアップしていった。この取組を積み重ねることで、「教育相談支援シート2 配慮を要する子どもの様子」や「教育相談支援シート3 学校適応指導教室通級者一覧表」を追加して作成していった。このような取組をすることで、学校だからできることや教師だからできることとして、不登校問題の未然防止と早期発見や早期対応がある。

小林（2015）は、不登校問題を減少させていくことは、現在起きている不登校の子どもの問題の解消よりも、不登校を起こさないようにしていくことや不登校の原因となることにアプローチすることが重要であり、不登校を起きにくくすることや深刻な事態にならないうちに、手立てを講じることが大切であると述べている。

また、学校ではチームによる支援も効果的である。その子どもに関わる関係者で、対象の子どもに対して、より具体的にどのような関わりがより適切なのかを話し合い、その方針を共有する。チームによる関わりで必要になるのが方針の共通理解である。そのチームの動きを学校全体で支え、支援が軌道にのったときに、子どもの学校不適応の課題が徐々に改善して、全体として不登校が減少していくと考える。不登校を減らすうえで、不登校のきっかけにアプローチすることは、多くの場合、教師にしかできない。学校内で友人関係や仲間関係に目配りをし、子ども間の人間関係を良好に保ったり、学業場面でのつまずきを支援したりすることは、学校にいる教師以外には難しいと考える。

（2）「教育相談支援シート1 月別欠席累積表」の概要と記入について【資料：図1】

別添資料：「教育相談支援シート1 月別欠席累積表 記入例と説明」

図1は、毎朝、養護教諭が欠席者を確認して取りまとめをしている。欠席の理由（出席停止等は備考欄にその旨を記入する）を問わず、月ごとに1か月に3日以上欠席をした日数を記入して、欠席日数の変化の様子を見る。学級担任は欠席に対しては敏感にあたたかく対応し、心のサインを見逃さないようにしたい。悩みごとがある子どもは、日常の生活の中で様々なサインを発信している。その際に子どもが発するサインとしては、表1のようなことが考えられる。（表1）

また、欠席や遅刻の連絡時における教職員や学校の対応としては、欠席1日目から月の累積で6日を超えた場合までを段階別に分けて、具体的な対応を示している。示されている対応を実際に行うことで、経験の差に左右されることなく、経験が浅い教職員でも不安を感じることなく子どもに対応できるのではないかと考える。特に、欠席が長引いた時点で対応する対処療法的な関わり方では登校再開までに時間が掛ることも予想される。そのことは、子どもや保護者の精神面での負担も大きくなる可能性がある。子どもが欠席した時点から、学校としてどのような対応をするのかを教職員が共通に理解して、そのケースに応じた適切な対応を行うことが不登校の未然防止につながると考える。欠席や遅刻の対応については、段階を踏んだ対応を確認しておく必要があると考える。欠席や遅刻の連絡時における対応としては、共通理解した内容を示している。（表2）

さらに、子どもに支援をしていくうえで、保護者との関係性の構築は重要となる。電話連絡ばかりで様子を把握するのではなく、教師自身が足を運んで家庭との連携を図ることが大切となる。そこで、家庭訪問をする際の留意点を以下にまとめている。（表3）

家庭訪問の際の留意点としては、不登校が継続する子どもに指導や支援をすすめるうえで、登校を促す働き掛けやチームでの関わりだけではなく、家庭訪問等で信頼される関係を築くとともに、学習や進路支援を行うことが必要となる。

〈表1〉子どもが発するサインの例

子どもが発するサイン	家庭でのサイン
<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体の不調を訴えて保健室に行く機会が増える</li> <li>・遅刻や早退が多くなる</li> <li>・自己否定的な言葉やイメージを持つようになる</li> <li>・休日の翌日や特定の教科や試験がある日の欠席が多くなる</li> <li>・部活動や委員会活動を休みがちになったり、辞めたがったりする</li> <li>・友人との関わりが少なくなり、学級の輪から離れがちになる</li> <li>・学習への取組の様子が変わり、意欲の減退や成績の低下が見られる</li> <li>・忘れ物が多く、ぼんやりすることが多くなる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前夜には学校に行く準備をするが、翌朝になると起きてこない</li> <li>・朝になると腹痛等の症状を訴えるが、欠席をすると症状が無くなる</li> <li>・学校に行こうとする時、体が硬直して動かなくなることがある</li> <li>・食欲がなく、顔色が悪い</li> <li>・夜遅くまで起きていて寝付けずに、眠りも浅い</li> <li>・家族と会話することを避けがちになり、部屋にこもる時間が長くなる</li> <li>・理由もなくイライラしたり、周りの人や物に八つ当たりしたりするようになる</li> </ul>

〈表2〉欠席日数別による教師や学校別の対応例

欠席日数	教師や学校の対応
1日の場合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級担任が電話等で声を掛けて安心して休み、登校できるように促す</li> <li>・連絡がない場合は、必ずその日のうちに連絡を取って様子を確認する</li> </ul>
2日の場合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様子を聞くとともに、保護者の様子から登校渋りの兆候がないかを推察する</li> <li>・欠席の理由があいまいな場合は、家庭訪問を行う</li> </ul>
3日の場合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理由がはっきりしていても家庭訪問を行い、保護者にも安心感を与える</li> <li>・欠席が続くことで不安や学校へ来にくくならないよう配慮して、安心して再登校できるような支援を行う</li> </ul>
連続3日の場合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級担任等が家庭訪問を行う</li> <li>・校内支援委員会等で支援について検討することも考えたい</li> </ul>
月の累積で3日を超えた場合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級担任等が家庭訪問を行う</li> <li>・心身のバランスを崩している可能性を考慮して、悩みや不安に寄り添う</li> <li>・不登校の予兆と捉えて校内支援委員会を中心として、チームでの対応が行えるように、各自の役割を明確化して対応できるような体制を整えておく（支援会で使う資料の準備等を行う）</li> <li>・子どもや保護者の心情を理解しようとする関わり信頼を大切にする</li> <li>・保護者にも心配していることを伝えて、家庭での様子等を聞く</li> </ul>

月の累積で6日を超えた場合	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学級担任等が家庭訪問を行う</li> <li>・合計で6日以上の場合は、校内での支援チーム（子どもと信頼関係が築きやすいメンバー）を編成する</li> <li>・学校生活（学習面と生活面のサポートを開始する</li> </ul>
その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>・欠席や遅刻の連絡がない場合は家庭や保護者に連絡をしたり、在校生に兄弟姉妹がいれば、様子を聞いたりして状況を把握する</li> </ul>

〈表3〉家庭訪問の際に留意すること

家庭訪問の際に留意すること
<ul style="list-style-type: none"> <li>・短い時間でも定期的に継続して家庭訪問をする</li> <li>・事前に連絡を入れたり、定期的な訪問を継続したりする</li> <li>・教師という立場を意識し過ぎることなく、子どもとの関係をつくる</li> <li>・保護者の不安や否定感を理解して、それを軽減できるような対応や会話を行う</li> <li>・子どもや保護者の気持ちを想像しながら話したり、聴いたりする</li> <li>・子どもと一緒に活動（運動やゲームなど）をしたり一緒に時間を過したりする中で、子どもの世界への理解につなげられるようにする</li> <li>・学校行事や学級生活の様子を伝えて、学校や学級の一員であることを意識できるように働き掛ける</li> <li>・家庭でできるもの作品などは作成させる。完成したら、本人の了解を得たうえで学級で紹介したり友人の感想をフィードバックしたりして、本人と学級をつなぐ</li> </ul>

(3) 「教育相談支援シート2 配慮を要する子どもの様子」の記入について【資料：図2】

別添資料：「教育相談支援シート2 配慮を要する子どもの様子 記入例と説明」

図2は、教育相談担当主任と各学年の教育相談担当者、養護教諭がそれぞれの立場からの情報を収集して集約する。特に、各学年からの情報は各学年の教育相談担当が、学級担任とのやり取りや学年会での情報交換の内容を記入していく。その子どもについての新しい情報は文頭に★印を入れて整理するなど、ひと目で分かりやすいようにした。

(4) 「教育相談支援シート3 学校適応指導教室通級者一覧表」の記入について【資料：図3】

別添資料：「教育相談支援シート3 学校適応指導教室通級者一覧表 記入例と説明」

図3は、教育相談担当主任が、適応指導教室から出される報告書を転記する。また、定期的に養護教諭や通級している子どもの学級担任、教育相談担当が適応指導教室を訪問して、適応指導教室支援員からの聞き取りや月ごとの通級に対する報告書面で得られた情報を記載する。その子どもについての新しい情報については、文頭に★印を入れてひと目で分かりやすいようにした。

### 3 「教育相談支援シート」の活用について

(1) 教育相談担当者が統括する

校内支援体制の充実については、教育相談担当主任が中心となってその内容を統括することで、子どもの状況及び対応を把握することができる。子どもについてのそれぞれが知り得た情報を、他の関係者に全く知らせなければ連携は成り立たない。校内での連携をスムーズに行ううえで、「教育相談支

援シート」の作成や活用について、各担当への依頼と取りまとめを行い、週1回の教育相談部会で情報共有を図り、その後の対応を検討している。

#### (2) スムーズな引継ぎの資料として活用する

継続した切れ目のない支援や対応の引継ぎは、校内支援体制を整えるうえでは重要な課題である。前年度までの情報を次年度にスムーズに引き継ぐことが、学校生活において子どもに負担を掛けることが軽減され、その保護者にとっても安心感を与えることにつながると考える。

#### (3) 個人情報を取り扱ううえで配慮する

校内外での支援内容や子どもの情報の共有については、専用のフォルダを作り、各担当や学級担任が負担感を軽減するために、箇条書きや事実のみを簡潔に記入することを共通理解している。また、個人情報を扱うという点で、十分配慮することを共通理解している。

基本的には、その時関わった関係者の中で必要な情報を共有し、秘密の保持や個人情報の保護などについての教職員間の共通認識が求められる。情報の内容によっては、管理職まで報告を上げている。

### 4 「教育相談支援シート」を使用した結果

教育相談部会は、1週間の時間割に組み込まれて確実に実施することができている。「教育相談支援シート」を学校全体での支援に活用するに当たり、学年会（週1回程度の実施）での情報や教職員の日常の会話で得られた情報を収集したり積み重ねたりすることで、子どもの様子を随時把握している。子どもをめぐる状況を把握することで、早期発見や早期対応が可能であることやチームによる支援資源が豊富で把握できること、関係機関との連携が取りやすいことが挙げられる。これは、学校における教育相談の大きな利点であり、また、随時把握することで、子どもの個々の事例の問題行動等の未然防止や予防的な対応ができる可能性が高くなる。以上の視点を取り入れながら、校内での実践に取り組んでいる。

その実践の中で中学2年生の生徒の様子が気になり、教育相談部会であがってきた。子どもの様子は、1学期後半から学級内での友人関係が気まづくなり、欠席が増え始めた。保護者から心配の連絡が入り、しばらくは学級担任と担当学年教職員で対応をしていた。2学期が始まり、学校行事にも参加することができなくなり、2学期半ば頃から徐々に教室に入ることができなくなっていった。教育相談部会では、欠席理由や遅刻・早退の様子、保護者からの訴えなどを丁寧に聴いていった。学級担任や学年主任、学年教育相談担当、養護教諭、スクールカウンセラーとの連携の中で、別室で学習を促がしたり一緒に活動したりする中で、徐々に欠席が減少していった。参加しやすい授業を受けることから始めて、12月末には教室で給食を食べることができるようになり、3学期からは教室復帰を果たすことができた。

上記の例のように、これまでの取組で「教育相談支援シート」を使用した結果について、以下の3点のようなことを考えた。

#### (1) 早期発見や早期対応が可能である

「教育相談支援シート1」は、養護教諭が全学年の毎月末の欠席日数を入力している。また、保健室来室記録とも併せて、気になる子どもをピックアップしている。毎週開催している教育相談部会では、「教育相談支援シート1」の様子と保健室来室記録が多い子ども、各学年会の教育相談担当から心配される子どもを合わせてみると、以前よりも気になる子どもが発見しやすくなり、日常生活の中で出されている様々なサインをつかむことが多くなった。客観的なデータを記録して積み重ねることで、早期の対応が可能となり、学級担任や学年の教育相談担当、養護教諭がそれぞれの立場で声を掛けて、

場合によっては、保護者と協力することがスムーズになった。

小林（2009）は、中学校で発生する不登校の多くは、小学校時代に登校渋りや不登校経験があり、不登校経験を見逃さず、きめ細やかな対応を早期から行うことは大切であると述べている。子どもは、日常生活の中で様々なサインを発信している。教職員がそれに気付くことができるかできないかは、教師の観察力によるところが大きい。子どもに対する気付きを、教師自身が互いに共有できることで、多様な角度から子どもの発するサインを早期につかみ、対応することが可能となることが実感できた。

### （2） チームによる支援資源が豊富である

学校には、学級担任・教育相談担当・養護教諭・生徒指導主事・スクールサポーター・特別支援教育支援員など様々な立場の教職員がいる。校長や教頭は管理職ならではの指導や支援でバックアップし、授業担当者や部活動顧問は日常の観察やきめ細かい関わりが可能である。福祉的な視点からの見立てや支援も可能になった。学校には一人の子どもをめぐる様々な教職員が多様な関わりを持つことができ、その子どもの良いところを認めて励ますことによって支えていくことができることが特徴である。また、子ども支援や指導については、学級や集団場面だけではなく、子ども一人一人具体的な支援の必要性や内容について把握し、それに基づいた支援計画を作成していく必要がある。

### （3） 関係機関との連携が取りやすい

学校の内部においては、（2）のように様々な教職員がいて連携を取ることができる。また、外部との連携においても、学校という立場から連携が取りやすいことが挙げられる。外部相談機関や医療機関、児童相談所等の福祉機関、警察等の連携は、困難な問題の解決に欠かすことができない。状況によっては地域や福祉、医療等との包括的な支援が必要とされ、単一の機関だけでは提供が不可能であることも考えられる。学校における教育相談の大きな利点は連携が取りやすいことであり、学校外の専門機関と連携を図るためには、連携活動の具体的な内容を明らかにして連携を図るための校内体制を整備することが大切となる。また、関係機関との日ごろからの連携体制づくりでは、関わる人が多くなる分、情報の管理が難しくなることも考えられる。しかし、知り得た情報を他の関係者に全く知らせなければ連携は成り立たない。その時関わった関係者の中で必要な限度で情報を共有し、それ以外には洩らさないという秘密の保持や個人情報の保護などについての共通認識が求められる。

スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、チームによる支援について、石隈（1995）は「異なった専門性や役割を持つ者同士が、援助の対象である生徒の状況について検討し、今後の援助のあり方について話し合う『作戦会議』である」とし、「複数の援助者が協力する体制の必要性からチームで行なうこと」とチーム支援を強調してきている。また、栗原（2002）は「学校は生徒に積極的に関わるのが可能であり、豊かな人的資源があるなど、その独自の利点を活かして援助ニーズの高い生徒に関わっていく必要がある。この時基本となるのはチームで関わること」とし、特別な援助ニーズを求めている不登校生徒の多様なニーズに応えるためには「関係者が集まって情報を出し合い、生徒の理解をしっかりと把握して援助ニーズを明確にし、どのような対応が必要かを考えて組織的に対応する」ことが求められているとしている。現状の支援体制をより効果的な支援ができるものに改善するためには、俯瞰的に見ながら支援を仕組むかが鍵となると考える。

## 5 まとめ

「教育相談支援シート」は、1年間を通して更新されていく。まとめられた膨大な情報は、そのまま次年度への引継ぎ資料となる。また、特別支援教育などと連動して、学級担任が作成する「個別の支援計画」「個別の指導計画」の資料ともなる。

今回の「教育相談支援シート」が様々な学校において活用され、効率的な校内支援体制の整備に役立つことを期待したい。また、これらの活用状況などを踏まえて、今後も改良や工夫を重ねていきたい。

【引用・参考文献】

- 新しい学校教育相談の在り方進め方ー教育相談係の役割と活動 栗原慎二 2002
- 石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門 学校心理学・実践編 石隈利紀・田村節子  
図書文化 2003年3月
- 不登校対策マニュアル 群馬県教育委員会 平成19年3月
- 平成20年度山梨県総合教育センター一般留学生研究報告書 河西永子  
学校でしかできない不登校支援と未然防止ー個別支援シートを用いたサポートシステムの構築ー  
東洋館出版社 小林正幸（監修） 2009年1月
- 生徒指導提要 2010年 文部科学省
- 『生徒指導の手引』（1981年）と『生徒指導提要』（2010年）の比較研究  
ー「生徒指導の意義」における記述方法・意味内容の比較を通してー  
上野和久 和歌山大学教育学部教育実践総合センター特別研究員  
和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要No.21 2011
- 教育相談体制におけるマニュアルの作成に関する研究ー保護者への支援を中心としてー  
若尾賢介（安芸郡海田町立海田小学校）  
広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要第11巻 2012
- 小林正幸 東京学芸大学教育実践研究支援センター教授 教育オピニオン 2015
- 教育相談活動における学校内連携の在り方についての質的検討 角田絢 指導：桂川泰典  
人間科学研究 Vol. 29, Supplement (2016)
- 不登校の未然防止 これだけは！ 岐阜県教育委員会 平成28年2月改訂版
- 不登校の予防・対応のために【改訂版】 高知県教育委員会事務局 人事教育課 平成28年3月
- 小中学校における多職種連携および多職種による援助チームの研究の動向と課題  
筑波大学心理学研究第56号 67-80 岡安朋子, 飯田順子
- チームとしての学校の機能を生かした教育相談体制の在り方  
中田貢（藤女子大学文学部文化総合学科） 藤女子大学 QOL 研究所紀要 2018
- 子どもの教育相談の充実について ～学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり～（報告）  
教育相談等に関する調査研究協力者会議 平成29年1月
- 教育相談体制充実のための手引き 鳥取県教育委員会 平成30年7月 令和元年9月一部改定  
長期欠席・不登校対策スタンダード（本編） 佐賀県教育委員会 令和2年1月

(2021年1月29日 受理)

**教育相談支援シート1 令和〇年度月別欠席累積表** (※1か月に3日以上欠席者を記載する)

欠席の理由を問わずに、1か月に3日以上欠席であれば必ず計上する

学級	名前	4月(15)	5月(19)	6月(20)	7月(15)	9月(20)	10月(21)	11月(20)	12月(18)	1月(17)	2月(18)	3月(17)	合計	備考
11年1組	〇〇〇〇	1	2					3	1	0	1	0	26	
21年1組	〇〇〇〇	0	0					4	4	0	2	0	15	
31年1組	〇〇〇〇	0	0					0	0	4	0	0	6	
41年2組	〇〇〇〇	0	4					7	9	6	3	0	44	
51年2組	〇〇〇〇	1	2					1	4	3		0	30	
61年3組														
71年3組														
82年1組														
92年2組														
102年2組														
112年3組														
123年2組														
133年3組														
143年3組														
15														
16														
17														
18														
19														
20														

その月の登校日を記入する

欠席連絡が入っても、電話等で声を掛ける

・合計で3日を超えていたら、家庭訪問を行う  
 ・保護者にも家庭での様子を聞く

・家庭訪問を行う  
 ・合計で6日以上の場合は、校内での支援チームを編成する  
 ・学校生活(学習面と生活面のサポートを開始する)

連続していれば、家庭訪問を行う

図1 「教育相談支援シート1 月別欠席累積表：記入例」

・それぞれの担当(学年及び保健室、教育相談担当)が入し、  
情報を更新していく  
・シートは新たに保存していく

・毎週の教育相談部会で、更新していく  
・シートは新たに保存していく

教育相談支援シート2( )配慮を要する子どもの様子(※新しい情報は、文頭に★を付けてください。) ○月第○週現在

NO	組号	名前	現 状	現 在 の 対 応	連 携 状 況 (医療機関・外部関係機関)	備 考 (診断名・心理検査)
1	1	6	○○との関係で精神的に不安定になり、保健室に行くことが多い。		○○○	
2	1	25	・大人との会話はできる。 ・文字が苦手である。	○○○クリニック受診	○○○クリニック	WSO-IV(FISQ:78) 9月転入
3	2	2	一人では学習に取り組むことができない。	・利用している医療機関や外部専門機関名を記入する		ADHD
4	2	24	・欠席が多く、登校時間も遅くなっている。 ・保護者は、友人となじめないと言っている。	校内での適応指導	放課後クラブ	小学校の頃はほぼ毎日遅刻していた。
5	2	33	家庭の経済状況が悪くなっている可能性がある。	進路保護関係の書類を渡している。	放課後クラブ	エビペン使用
6	3	17		・簡条書きで、事実や具体的な行動を記入する		
7	3	23				
8	4	★香山 ○○	特定の生徒に対して、悪口を言ったり間違いをからかったりする。	教師による観察と指導		
9	5	★池川 ○○	・授業中落ち着かない。 ・○○との関係が悪く、トラブルが頻回している。			
10						
11						
12						
13						
14						
15						

図2 「教育相談支援シート2 配慮を要する子どもの様子：記入例」

教育相談支援シート3 令和〇年度 学校適応指導教室通級者一覧表 (〇月分) 《〇月〇日現在通級状況》  
★…新しい情報に付ける

年	組	号	氏名	今月の通級日数	今年度の累積欠席日数	現 状	現 在 の 対 応
1	1	15	〇〇 〇〇	8	34	適応指導教室に通級している。通級日は7/1,2,3,8,9,13,14,16,17,22	学級担任が適応指導教室を訪問している。
2	1	23	〇〇 〇〇	10	42	適応指導教室に通級している。	毎週金曜日に、学級担任が家庭訪問をしている。
3	2	6	〇〇 〇〇	12	45	適応指導教室に通級している。	・連絡は、学級担任から父親へ行う。 ★本人に会うことが難しい。
4	2	9	〇〇 〇〇	7	42	定期的に、適応指導教室に通級している。	外部専門機関(SPC)と連携を取っている。
5	2	3	12	〇〇 〇〇	9	42	・2週間に1回程度の家庭訪問を実施している。 ★本人とは話では話ができるが、保護者との連絡がつきにくい。
6	3	1	17	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; background-color: #d9e1f2;">                     ・学校適応指導教室から出される報告書に記載してある通級日数を転記する                 </div>			
7	3	3	8				
8							
9							
10							

図3 「教育相談支援シート3 学校適応指導教室通級者一覧表：記入例」